一〇〇四										
	この頃、和泉式部日記（一〇〇四年頃）									
一〇一一										
	この頃、紫式部日記（一〇一〇年頃）									
一〇一六										
	この頃、源氏物語成立（一〇一一年頃）									
一〇一九										
	刀伊の入寇（女真族が対馬に侵入、藤原隆家ら撃退）									
一〇二五										
	小式部内侍 没（二六才）									
一〇二七										
	藤原道長 死去									
一一九二										
	源 頼朝 鎌倉幕府を開く									
一一六一										
	藤原定家生る									
一二〇五										
	藤原定家 新古今和歌集撰上									
一二一二										
	鴨長明「方丈記成る」									
一二一五										
	藤原定家 夜久野日置高倉神社にて歌を詠む（五十四才頃）									
鎌倉中期 一二三二										
	天橋立に立ちて歌を詠む									
一二三五										
	藤原定家 新勅撰和歌集撰上									
一二四一										
	藤原定家 小倉百人一首を編纂する									
	藤原定家 没す（八〇才）									
	日記「明月記」あり									

四条		順徳		土御門	後鳥羽	二条	後一条		三条	一条

日置を詠んだ歌
朝日さす日置の里をながむれば
卯の花ひらくなつかしきかな
定家

天橋立を詠んだ歌
むば玉の夜わたる月の澄む里は
げに久方の天橋立
定家

娘の小式部内侍とともに、中宮彰子（藤原道長の娘）に出仕。このころ、中宮彰子には赤染衛門や紫式部も仕えており、親交があったと思われる（一〇〇六年頃）

藤原保昌と結婚（一〇〇七年頃）

夫藤原保昌、丹後守に任ぜられる。和泉式部も夫に従い宮津に赴く（一〇一一年頃）

その途中、福知山（吹風山）で歌を詠んだと云われている

「丹波なる吹風山の紅葉葉は ちらぬさきより ちるかとぞおもふ」

娘の小式部内侍が死去。娘を哀傷した歌を多く詠む。（一〇二五年頃）

夫藤原保昌、大和守に転ずる。和泉式部は引き続き宮津にとどまる。ある伝承によると、後任の国司藤原兼房は隠棲している式部を訪れて歌について大いに語り合い、のちに宮津、山中の地に式部のための庵を建立して老いを慰めたという。（一〇二六年頃）

一〇二七年以後の消息は不明だが、このころ58歳で死去したという説が有力である。（一〇三四年頃）

母親の和泉式部とともに、中宮彰子に出仕する。（一〇〇六年頃）

なお、宮中で「大江山～」の句を詠んだエピソードは、小式部十五、六歳ごろといわれている。（一〇一二年頃）

藤原教道（道長の息子）と恋仲になり、静円を産む。

藤原公成との間に、頼仁を出産するが、産後に死去する。享年二十五、六歳といわれる。（一〇二五年頃）